

伝説の浮浪者王コック・ローレル

—十六世紀イングランド社会における浮浪者像の生成

中野春夫

本論の対象は十六世紀イングランドのパンフレットや演劇作品に登場する浮浪者の特異なイメージである。本論はそのイメージの起源である浮浪者王伝説を辿りつつ、同時代において浮浪者像がどのように形成されたのかその過程を分析したい。

一．コック・ローレルと悪党たち

一六一〇年のロンドンで出版された『矯正院の鞭打ち役人、ばらし屋マーティン (Martin Marhall, Beadle of Bridewell)』はイングランドの裏社会を束ねる「長い間知られることのなかった浮浪者たちの軍団」とその歴史を解説したものである。この種の裏社会ものは一五六〇年代からしばしば出版されており、とくに一五九〇年代からは「兎狩りパンフレット (Cony-catching pamphlets)」として知られる浮浪者詐欺の紹介本が人気を博していた。裏社会にかんする一連の出版物の中で『矯正院の鞭打ち役人』の売り物はイングランド初公開と謳われた「浮浪者年代記 (the Chronicle of Crachropes)」であり、この年代記はイングランドの犯罪史上「最も悪名高い悪党」に言及してい

る。

全国評議会 (The General Council) の指名により、最も悪名高い悪党であるコック・ローレルがスケルトンの跡を継いで浮浪者の団長に就任した。コック・ローレルの職業は鑄掛屋であり、鍋と金槌を見せかけに持っていた。彼が良い獲物を見つけると、これらの道具を溝に放りだして追い剥ぎを行ってから (play the padder) 町を出ていく。街を立ち去りながらコック・ローレルはこうどなる、「鑄掛屋(じやうけい)だ」。 (Martin Markall 418)

この「浮浪者年代記」には王位僭称者パーキン・ウォーベックの残党スケルトンなど実在したらしい人物だけでなく、明らかにフィクションと分かる人物も登場している。日本でいえば虚実と関係なく石川五右衛門や鼠小僧次郎吉、弁天小僧など盗賊の有名どころをすべて登場させる盗賊大スター列伝に相当する。その中で悪党中の悪党とされるのがコック・ローレルであり、上記の引用によればスケルトンを継いで彼が浮浪者「全国評議会の指名により」浮浪者王に就任した。この人物の職業は鑄掛屋であるが、獲物を見つければ商売道具を溝に隠し、「追い剥ぎを行って」何食わぬ顔で鑄掛屋の顔に戻る。鑄掛屋は堅気の世界における表の顔にすぎず、コック・ローレルの生業は窃盗犯なのである。

『矯正院の鞭打ち役人』の未詳の作者によると、コック・ローレルは浮浪者たちの「議会制定法」(statutes)ばかりでなく、浮浪者の位階と組織の役割分担をも定めた人物であり、いわば裏社会の制度を作りあげた創設者になる。未詳の作者はコック・ローレルの一連の功績を紹介するさいにある文献に言及しており、その言及はこの作者がジョン・オードリーの『浮浪者の友愛団 (The Fraternity of Vagabonds)』(一五六一年)を主要材源としていたことを

示している。

コック・ローレルこそ「浮浪者一覽、すなわち悪党たちの二十五階級 (the Catalogue of Vagabonds, or Quatern of Knaves, called the five-and-twenty orders of knaves)」を創設した張本人である。この資料はただ存在し、どの書籍商でも手に入るものでこれ以上の説明は控える。
(Martin Markall 418)

ここで言及されている「浮浪者一覽、すなわち悪党たちの二十五階級」とは『浮浪者の友愛団』の第二部に当たる「コック・ローレルによって創設された悪党の二十五階級 (Quatern of Knaves, Confirmed for ever by Coch Lord)」である。引用文の最後で言及されている「この資料はまだ存在し、どの書籍商でも手に入る」という情報が正しいとすれば、オードリーのパンフレットは一六一〇年の時点でも入手可能であり、かつその内容がそれなりに知られていたらしい。言い換えれば、十七世紀初めのイングランド社会で浮浪者王コック・ローレルの名が知られていたのであれば、その名を広めたのはオードリーの『浮浪者の友愛団』であったことになる。

『浮浪者の友愛団』のタイトルページは、浮浪者の集団への関心を掻きたてる商業的な工夫を凝らしている。コック・ローレルは「コック・ローレルによって創設された悪党の二十五階級」のタイトルにその名が挙げられているだけで、本文そのものには全体をつうじ登場人物として登場することがなければ、その名前すら言及されていない。コック・ローレルが登場するのはタイトルページに掲載された「組長 (the Upright-man)」とコック・ローレルの間で交わされるバラッド形式の謎めいた対話においてである。

組長はこう語る――

俺たち浮浪者友愛団がどこにいるかだって、

もしその居場所を知りたけりゃ、

グレイヴズエンドにゃ滅多に寄らない

船を探してみるといい。

コック・ローレルはこう答える――

その船でついでに見つかるはずだ、

俺の身内の悪党たちも。

どこでもいいから歩いてみな、

俺の身内はそこら中にたむろしている。

(Awdaleley 87-88)

「組長」が言及するグレイヴズエンドとは、日本であれば海上交通の基点である一昔前の横浜に当たり、テムズ川の下流にある港町である。この港には関税役人が常駐しており、組長補佐が言う浮浪者の友愛団は役人を避けているらしい。一方、コック・ローレルの返答では「グレイヴズエンドにゃ滅多に寄らない船」を探すとコック・ローレルの「悪党たち」も見つかることになる。一見すると意味不明な対話バラッドではあるが、「船」というキーワードに反応し、浮浪者と関連する特定の文献を類推できれば浮浪者のイメージにかんする系譜学的な理解が可能になる。浮浪者と「船」を結びつけるのはゼバステアーン・ブラントの『阿呆船 (Das Narrenschiff)』（一四九四年）である。イ

ングランドでは一五〇八年にアレグザンダー・バークレーによって同書の英語訳版 (*Ship of Fools*) が出版され、さらにその数年後、今日では前半部が散逸しているものの明らかにブランドの『阿呆船』から靈感を受けていることが分かる作者未詳の『コック・ローレルの船 (*Cocke Lorelle's Bote*)』(一五一〇年頃) が登場する。

『コック・ローレルの船』のテキストは一部だけが残っており、現存するそのテキストも明らかに前半部のかんりの部分が散逸している。そのため『コック・ローレルの船』は不倫願望の人妻がコック・ローレルの許を訪れるという前後の脈絡が不明な状況から始まる。

彼女は別の男性と結ばれ、

その男のベッドで寝たいと願っていたから
ほとんどやりたい放題だった。

彼女に怒れば、彼女は子羊のように泣きつづけ、
いったん機嫌を損ねれば悪魔のように喚きだす。

夫が彼女を「大事な宝物」と呼ぶと、
妻はいつも「クソ野郎」

「あなたの世話なんかならないよ」と答え、
みことなまでに息が合っていた。

それを聞いて、コックはこう言った、
「聖ヨハネに誓って、こいつは女の鑑だ。」

お前を俺の洗濯女にしてやろう、

俺のものをすべてキレイにしておけよ、

これからはベッドを一緒にくっつけて

なんの遠慮もなくやろう」。

(Cocke Lorelle's Bote II. 1-15)

コック・ローレルとは「悪党の親玉 (chief rascal)」という意味の俗語である。その名が暗示するとおり、コック・ローレルの船にはロンドン中から靴修繕職人 (cobbler) や皮なめし職人 (tanner) 、肉屋 (butcher) 、粉屋 (miller) などさまざまな職業の「悪党たち」が集まってくる。船上では昼間からどんちゃん騒ぎの酒宴が繰り広げられ、深夜になると船はイングランド各地の港に停泊し、新たな船員たちを受け入れる。物語自体は聖職者や修道女が乗り遅れ嘆き悲しむ場面で終わり、「私」という語り手が「コック・ローレルに会いたければもう一年待て」と聖職者たちに告げる台詞で締めくくられる。

コック・ローレルの船は日常生活の厳格なルールから一時的にでも逃避したい人間にとって聖域もしくは楽園であるらしく、聖職者を含めてイングランド中の逸脱者、不適応者、落伍者もしくはその予備軍が訪れてくる。不倫願望を持つ人妻も元はといえば妻という枠に収まりきれないから、コックの「洗濯女」(laundress) は愛人、売春婦の隠語を望んでいるらしい。同じく手が血まみれで周りをハエが飛んでいる「肉屋」もコックのもとを訪れてきて、この船に身を寄せようとする。この肉屋は「ズボンの太ももあたりに獣脂が染み付き蛆をわかせている」ために、誰も一緒にいたがらないからである。何らかの理由で社会生活を送れなくなった人間にたいしては、いつの時代でも同情と嫌悪の二通りの反応がありうる。コック・ローレルの船は好意的に解釈すれば逸脱者の避難所である一方、批判的

に見れば落伍者の隔離所である。浮浪取締法がまだ本格的に導入されていない十六世紀初めの作品であるためか、『コック・ローレルの船』は十六世紀イングランド文学において例外的に同情的な反応を示している点が興味深い。

『コック・ローレルの船』が出版されてからおよそ半世紀が経過すると、社会的不適応者にたいする社会の姿勢も全般的に厳しくなったようである。『浮浪者の友愛団』の巻末に収録されている「コック・ローレルによって創設された悪党の二十五階級」は、すべて少年もしくは若者と思われる不適格な奉公人たちを二十五種類に区分したものである。

一 独りよがり (Troll and troll by)

独りよがりとは誰からも指図を受けず、誰にも指図ができない人間である。この者は仕事場でやりたいようにやろうとするが、権威を持たず、感謝もされない。そしてついには悪党のように仕事場からたたき出される。

二 身の程知らず (Troll with)

身の程知らずとは奉公人と主人の違いが分からない人間である。この悪党は雄鶏のような派手な帽子をかぶったまま主人の隣に座り、通りを歩くときは主人と頬をくっつけんばかりに並んで歩く。(Awdaley 98)

十六世紀の用語として「悪党 (knave)」は今日と同様に反社会的な人間 (OED, Knave 3) を意味した。ただしこの語の原義は「少年 (boy)」(OED, knave 1) であり、十六世紀初期には「召使の少年」(OED, knave 2) の意味でも使われていた。コック・ローレルの「悪党たち (knaves)」は十六世紀イングランド社会の基準によって悪党集団

であると同時に、手の付けられない若年層を連想させる点で社会的不適応者の集団なのである。五番目に挙げられる「寝小便たれ (Chase Litter)」は夜間にきちんと用足しができず、朝起こしても起きられない子供の奉公人であり、九番目の「仮病使い (Nichol Heartless)」は主人から仕事を言いつけられると心が重くなり、病氣と称して仕事をサボる召使いである。

コック・ローレルという登場人物はもとから鑄掛屋の浮浪者王であったわけではない。彼は伝説の起源となる『コック・ローレルの船』の設定において、ナイト爵をもつ船のキャプテンであった。ところがこの風刺詩が出版されてから百年後に『矯正院の鞭打ち役人』が出版されたさい、コック・ローレルの職業はナイトから鑄掛屋に変わり、さらに船のキャプテンという設定も裏社会の支配者へと変更されることになる。社会階層の最底辺にたいする十六世紀イングランド社会の意識の変化はコック・ローレルと彼の「悪党たち」の特性を十六世紀のある時点から大きく変化させたのである。

二．浮浪取締法における浮浪者の定義

本論が対象とする浮浪者は十六世紀イングランドの法律で *vagabond* とか *rogue* と呼ばれた存在である。*vagabond* の原義は「放浪する者」であり (*OED, vagabond 1; rogue 1*)、住所不定の点は今日のホームレスと同様である。ところがホームレスとは異なり、十六世紀イングランドの浮浪者は江戸時代の無宿者と同じく犯罪者と見なされていた。さらに住所不定だけが *vagabond* の条件ではなかった。

一五四八年の「浮浪者取締法」(1 Edw. VI. c. 3) の定義によれば、「家の中に引きこもっていたり、無為に放浪す

る (be lurking in anny howse or howses or loyteringe or Idelye wander)」者、そして健常でありながら「仕事を求めようとしない、もしくは従事すべき期間に離職する (not seeking Work, or leaving it when engaged)」者が浮浪者と認定された。⁽¹⁾前者は今日の引きこもりやホームレスであり、後者には契約途中の退職者や労働日数がそれほど多くないフリーターが該当する。ただし「生活費を十分賄えるだけの年間収入」を有する不動産所有者はかりに地方を放浪したとしても浮浪者とは見なされない。また障害者や高齢者など労働不能な者たちも浮浪者とは見なされず、一五三六年以降救貧法による救済の対象となった。十六世紀イングランド社会の浮浪者とは住居と職業にかんし明確な社会関係の拠点を持たない貧困者、すなわち社会関係から半ば脱落している社会的弱者なのである。A・L・バイアーが指摘するとおり、十六世紀イングランド社会の浮浪者とは「行為ではなく、社会の位置づけによって」犯罪者と見なされた者たちだった(バイアー、七頁)。

『コック・ローレルの船』の出版年は一五二〇年頃と推定されているが、浮浪者の存在はこの時期の行政にとって深刻な社会問題とは意識されていなかった。ジョン・パウンドが指摘しているとおり一四九五年に制定された浮浪取締り法(11 Hen. VII. C. 2)が「あいまいにはあるが、浮浪者問題を扱った唯一の議会制定法」であり(Pound 37)、この法律は浮浪者を「怠惰な浮浪者、および疑わしい生活を送っている疑わしい人々 (vagaboundes idell and suspete psones lvyngg suspiciously)」とかなり大雑把に定義していた。そのあいまいな定義が徐々に具体的になっていくのが一五三六年以降であり、右にあげた一五四八年の議会制定法は貧困対策の飴と鞭のうち鞭が適用される二つの対象を明文化したものである。

『浮浪者の友愛団』の二部構成、さらにはタイトルページにおける組長とコック・ローレルとの間で交わされる対話詩という形態そのものが二種類の浮浪者というコンテクストから説明できる。同書の第一部は住所不定の放浪者を

扱い、第二部の「コック・ローレルによって創設された悪党の二十五階級」は離職した非就労者としての若年浮浪者を紹介しているのである。対話詩もタイトルページに置かれていること自体、それがパンフレットの目次に相当するものであることを暗示しており、組長の「浮浪者友愛団」とコック・ローレルの「悪党たち」はまさしく議会制定法による二種類の浮浪者をジャーナリストティックに誇張して表現したものに他ならない。

アーサー・キニーの指摘どおり『コック・ローレルの船』の未詳の作者が船という着想をブラントの『阿呆船』から得ているのであれば（Kinney 88）、ブラントの阿呆船もコック・ローレルの船も何らかの点で社会を浮遊する者たちを乗せていることになる。ただしどのような点で浮遊していると見なすかは法学者であり神学者であるゼバステイアン・ブランドと『コック・ローレルの船』の作者とでは明らかに異なっていた。以下の引用は『阿呆船』の序文に相当する箇所、ブランドが「船」という設定を思いついた経緯を述べたものである。

通りも横丁も阿呆に満ち、

馬鹿な行為を繰り返し、

自分じゃそれが分からない。

そこで私は、阿呆船

造ってやろうと考えた：

阿呆鏡と申そうか、

自分の阿呆がよく分かる。

ブランドが「阿呆」と見なすのは物欲や名誉欲、性欲に凝り固まって愚行を繰り返す不品行、不道德な輩であり、のちにベン・ジョンソンが喜劇的に諷刺する類の登場人物たちである。その阿呆たちが『コック・ローレルの船』では雇用関係、家族関係、職場での交友関係などさまざまな社会関係から追いだされた者たち、あるいは外れたいと願う者たちに変えられている。とりわけ大きな違いはブランドの阿呆船にリーダーがいない一方、コック・ローレルの船には逸脱者を束ねるキャプテンが存在する。浮浪者王コック・ローレルとその裏組織の神話がのちのイングラッド社会で発達する起源はここから生まれている。

先に触れたとおり、救貧と浮浪取締りがワンセットになって議会制定法に盛り込まれるようになるのは一五三六年の浮浪取締法(27 Hen. VIII c. 25)からである。一五三〇年代後半の作品と推定されている風刺詩『慈善院への大通り』(*The Highway to the Spital-houses*)には、明らかにこの一五三六年の浮浪取締法が言及されている箇所が存在する。

コップランド たしかこんな議会の法律がある、

五体満足の浮浪者 (strong vagabond) が捕ま、たならば、

数日間パンと水だけで、足枷をはめられ

広場でさらし者にされたうえ、

生まれ故郷に送還される…

こいつら浮浪者が目をつけているのが施しであり、

やつらは盗人、悪人の類で最も性質が悪い。

(Copland 9)

『慈善院への大通り』は著者ロバート・コップランドと聖バーソロミュー慈善院の門番との会話形式になっている。コップランドが門番に近頃どのような貧困者が施しを受けにくるかを尋ねると、慈善院の門番が負傷を巧みに装う偽帰還兵や売春婦、行商兼業の詐欺師物乞いたちを挙げる。『慈善院への大通り』の興味深い点は、貧困者への慈善がキリスト教徒の務めであることが強調される一方、右記の引用が示すとおり、健常でありながら慈善院で施しを受けようとする浮浪者が「最も性質が悪い」悪党として激しく非難されることにある。コップランドと門番が最後にあける悪党がコック・ローレルの一味であった。

コップランド　コック・ローレルの船に乗り組んでいる奴らもここに来るのか。

(Come any mariners hither of Cock Lorel's boat)

門番

年がら年中ひっきりなしに奴らは漂ってくる。

仕方がないので泊めてやり、施しをくれてやりはするが

やつらの後をクズ野郎たち (the fraternity of unthrifts) がついてきて

新しい仲間が次々にここにやってくる。

(Copland 24)

「コック・ローレルの船に乗り組んでいる」者たちは『慈善院への大通り』において失業者や離職者を指しており、右記の引用は彼らが一五三〇年代以降浮浪者と認定されるようになったことを示している。

パオラ・パリヤッティによれば、ローマ帝政時代以来ヨーロッパ社会は慈善にかんし二つの原則の間で揺れ動いて

きた (Pugliatti 32-33)。障害者および高齢者など明らかに就労が難しい人々に救済の手を差し伸べることについてはどの時代の社会でも一致していた。問題は貧困者の中でも就労可能でありながら、物乞いを行い生計を立てる人間にたいする対応である。ヨハン・クリュンストモスに代表される、貧困者にたいして前者と後者の区別をせず平等に慈悲 (mercy) を施すべしという理念がある一方、後者のような社会の寄生虫は慈悲に値せず、彼らに施しを与えるべきではないというユステイニアヌス法以来の法的な公正 (justice) 理念も前者とともに併存していた。十五世紀末以降、浮浪取締りと救貧関連の法律がヨーロッパ各地域で次々と制定されることは、中世期で優勢であった慈悲の理念が一五〇〇年頃を境目に公正の理念に圧倒されていく歴史的過程を物語っている。

コック・ローレルの「悪党たち」は今日でいえば障害や高齢以外の理由で生活保護を受給している人間、すなわち職業をもちながら、賃金だけでは生活できず施しによって生活を成り立たせていた者たち、あるいは就労する意欲はありながら職につけず、教会の慈善に頼らざるをえなかった者たち、さらには何らかの事情で離職した、あるいは離職したい者たちである。一五一〇年頃に成立した『コック・ローレルの船』は同情とまではいかないにせよ、同時代の社会で目立つようになった貧困者にたいして比較的寛容な描写をおこなっている点、慈悲の理念がまだ有力であった時代の作品である。

一方、一五三〇年代後半の作と推定される『慈善院への大通り』は新たに制定された浮浪取締法に言及しながら、慈善を食い物にする浮浪者を「最も性質が悪い」詐欺師として弾劾し、コック・ローレルの「悪党たち」もその一味に加えている。パリヤッティは刑罰の面で「物乞いと住所不定にたいしてイングランドの議会制定法が最も過酷で、非寛容的であった」と指摘しているが (Pugliatti 18)、一五四八年の浮浪取締法が引きこもりを含めたように、浮浪者の認定範囲も非常に広がった。一五六一年に出版された『浮浪者の友愛団』第二部の「コック・ローレルによっ

て創設された悪党の二十五階級」は同時代のイングランド社会が失業や離職者だけでなく、場合によっては協調性に欠ける若者までも犯罪者と認定する恐るべき社会であったことを示唆している。

三、裏社会神話の誕生

『コック・ローレルの船』の設定ではコック・ローレルは船のキャプテンであり、身分はナイトであった。それが約百年後の『矯正院の鞭打ち役人、ばらし屋マーティン』では浮浪者王へと変わり、職業も鋳掛屋になる。この背景には十六世紀半ばの議会制定法が浮浪者の職業を特定化したことが挙げられる。

チョーサーの『カンタベリー物語』は粉屋や収税吏など特定の職業人にたいするステレオタイプの差別的イメージがすでに十四世紀末から存在していたことを示している。ただし差別的なイメージが存在してはいても、この種の職業差別が法的に明文化されることはなかった。それが一五五一年、ライセンスを受けない地方巡業を違法とする「鋳掛屋と行商人にたいする制定法 (An Acte for Tynkers and Pedlers)」が成立し、この法律では鋳掛屋と行商人が名指しで非難されることになる。以下の引用はその冒頭の部分である。

鋳掛屋と行商人やその種の浮浪者 (Tynker Pedlers and suche like vagrant psonnes) はイングランド王国の共同体において必要である以上に有害であることは明らかであるので、以下のように…定める。

(F&G Edw. VI. c.21)

この法律そのものは一五四八年の浮浪取締法の延長にあり、一五四八年における無職で住所不定という浮浪者の要件を地方巡業者に拡大したものである。鑄掛屋と行商人はドサ周りをする典型的な職業であり、一五五一年の議会制定法でこの二つの職種が言及されている理由もまさしく地方巡業という特性にある。エリザベス朝演劇研究においてしばしば引用される一五七二年の浮浪取締法は「大衆芸人 (common player)」を規制対象としているが、これもライセンスを持たない地方巡業が法的に住所不定と認定された結果に他ならない。もちろんライセンスをもたない地方巡業が違法と見なされたのであって、鑄掛屋イコール浮浪者ではない。にもかかわらず一六世紀半ば以降、鑄掛屋と行商人には特異な差別的イメージが貼り付けられるようになる。

先にあげた一五六一年の『浮浪者の同胞団』は浮浪者たちの裏社会を解説したものであるが、興味深いことに著者オードリーは「同胞団」を構成する十九種類の浮浪者の中に「鑄掛屋」と「行商人」を含めていた。

行商人 (A Swigman)

行商人は行商用のリュックサック (a pedlar's pack) を背負っている。

鑄掛屋 (A Tinkard)

鑄掛屋は彼らがねぐら (bousing inn) と呼ぶエールハウスに道具袋を置いて飲んだくれ、

気が向いたときに物乞いに出かける。

(Awdalay 54-55)

窃盗犯である「かっぱらじ (Prigman)」や偽造者である「偽証書屋 (Jarkman)」などほかの浮浪者とは異なり、「鑄掛屋」と「行商人」は右記の引用が示すとおりどのような点で犯罪者なのか具体的に説明されていない。さらに言えば、十九種類の浮浪者のうち「鑄掛屋」と「行商人」だけが職業名である。明らかに一五五一年の議会制定法が鑄掛屋と行商人を地方巡業型浮浪者の例として名指ししたことが直接の原因で、鑄掛屋もしくは行商人であれば

かがわしい組織の一員であるのは当たり前と見なされるようになったのである。しかも右記の引用が示唆するとおり、十六世紀半ばから鑄掛屋には酔っ払いという特性が付与されるようになる。

一五六六年にケント州の元治安判事と称するトマス・ハーマンは彼が職業柄知りえた知識をもとに浮浪者たちの裏組織とその犯罪手口を暴露するパンフレット、『浮浪者と呼ばれるものへの警告 (*Caveat or Warning for Common Cursors*)』を出版した。この書は同時代の一般読者にたいし浮浪者の階層組織とその専門用語、名称を懇切丁寧に解説している点、今日におけるマフィアなどの解説書とよく似ている。ハーマンは *Ruffler* が「このおぞましい位階組織の第一位 (*first in degree of this odious order*)」であり、組長補佐に相当する「第二位」が「*Upright-man*」と呼ばれていると指摘しているが、じつはどちらの用語もジョン・オードリーの『浮浪者の同胞団』からそのまま転用(盗用)したものである。

ハーマンは浮浪者組織の構成員を男性浮浪者が十五種類、女性を九種類に区分し、その階級(役割)の一つにこれもオードリーから転用してきたと思われる「*行商人*」の名称を与えている。行商人がこの犯罪組織の構成員に挙げられる理由はハーマン自身の説明によると彼等が「*邪悪な*」犯罪者であるからではなく、議会制定法が無許可の地方巡業を違法と認定していたからに他ならない。

第十四章 行商人 (*A Swadder or Pedlar*)

行商人はかならずしもすべてが邪悪な輩であるわけではなく、むしろ犯罪には関心がない。彼らは組長補佐 (*the upright-men*) を非常に恐れているが、それは組長補佐が彼らの商売品と売上げを奪っていくからである。とはいっても行商人はこの高貴なイングランド王国のコモンローと議会制定法に反して非合法

の利益を得ているので、彼らを浮浪者の一員と認定するのが適切である (well worthy to be registered among the number of vagabonds)。 (Hamam 93)

「高貴なイングランド王国のコモンローおよび議会制定法」とは明らかに一五四八年と一五五一年の浮浪取締り関連の議会制定法を指しており、行商人が十六世紀後半期に犯罪集団の一員と見なされる背景がここにある。さらにハーマンは巻末でこの犯罪者集団の「卑しい、とんでもない言語 (the lewd, lousy language)」を紹介し、その語彙百十一語を解説している。それは「これら大胆不敵で獣同然の淫乱な乞食とむなしい浮浪者以外には理解できない、半ば英語が混じりあった言葉」であり、ハーマンによればこの符牒は浮浪者たちの間で「行商人のフランス語 (Pedlar's French)」と呼ばれていた。

浮浪者というカテゴリーは一連の浮浪取締法によって作られ、「同胞団」という裏社会組織と行商人や鋳掛屋などの構成員も少なからず浮浪取締法の規定から生みだされている。ところが浮浪者のイメージの方は明らかに議会制定法とは無関係に、浮浪者パンフレット作者の想像力によって段階的な発展をとげていた。オードリーの居酒屋に入り浸る「鋳掛屋」はハーマンによって「酔っぱらいの鋳掛屋」に改称され、酒好きに加えて女性を食い物にする極道、そして裏稼業という特性が与えられることになった。

第十三章 酔っぱらいの鋳掛屋 (A Drunken Tinker)

酔っぱらいの鋳掛屋は prig と呼ばれる畜生であり、とくに若い鋳掛屋が最悪である。彼らはかならず愛人を連れており、愛人が衣服やリンネル地など金目のものを持っていれば居酒屋での一杯のため質に入

れるか、即座に売り払う。また彼らはある間に愛人に飽きてしまい、新しい女に乗り換える。…彼らは見せ掛けに少しばかり鑄掛業をおこないながら、錠前外しや窃盗で (with picking and stealing) 生活の糧を得ている。(Harman 92-93)

一五五一年の議会制定法は鑄掛屋と行商人を浮浪者の典型的な職業として挙げていたが、ハーマンの解説が示すように浮浪者の犯罪性を示す特性はおもに鑄掛屋だけに付与されている。浮浪者のイメージにかんしてとりわけ重要な事実は、このハーマンの「酔っぱらいの鑄掛屋」の記述以降、鑄掛屋のキャラクターと裏稼業が文学作品あるいはパンフレットにおける浮浪者全体の代表的なイメージになることである。テイリーの諺辞典に収録されている鑄掛屋関連の諺は、十六世紀半ば以降のイングランド社会において、鑄掛屋であればいかかわしい商売するのが当たり前という偏見が存在していたことを示している―「鑄掛屋は穴を一つ修繕して、二つあける」(Tilly, 1347)。

時は下って十七世紀の初めごろ、ウィリアム・シェイクスピアが喜劇『十二夜 (Twelfth Night)』を執筆したさい、この劇作家はサー・トビーらの放縦な世界を浮浪者たちの定番的なイメージで表現していた。マルヴォーリオがサー・トビーたちの真夜中の大宴会をたしなめる時、その乱痴気騒ぎをする当人たちはこの執筆によって「酔っぱらいの鑄掛屋」に喩えられていた。

マルヴォーリオ 皆様、お気は確かか？ このような夜更けに鑄掛屋のような大騒ぎをするなど、正気とは思えないお振舞い。大声を張り上げ靴屋の小唄を合唱するとは、オリヴィア様のお屋敷を居酒屋に(2)変えるおつもりか。場所も時間も立場もわきままえられませんのか。

この引用はシェイクスピア時代のイングランド社会において居酒屋でのバカ騒ぎが鑄掛屋という特定の職業人の習性で喻えられたこと、そして同時代の観客がその喻えを理解できたことを示している。ハーマンによって作られた「酔っぱらいの鑄掛屋」のイメージはシェイクスピア時代のイングランド社会に深く浸透していたのである。

十六世紀の歴史編纂家であるウィリアム・ハリソンは『ホリンシェッド年代記』に収録された『イングランドの描写』の第十章「貧困者に与えられる給付について」(Of Provision Made for the Poor)において、同時代の浮浪者について詳しい解説を行っていた。ハリソンによればイングランドで浮浪者が出現したのは最近のことであり、ここ六〇年間に起こった現象である。ハリソンはその数が「現在一万人を超えている」と述べ、つづけて浮浪者たちの符牒である「行商人のフランス語 (pedlar's French)」に言及している。さらにハリソンの解説は浮浪者の分類に及び、ハリソンは「ある紳士」によって明らかにされた「怠惰な浮浪者の階層組織」について以下のように言及している。

近年ある紳士が多大の骨折りの結果、これら浮浪者たちの裏稼業を暴きだした。さらにこの人物は二十三種類の浮浪者をそれぞれ詳細に紹介しており、その記述は彼らがいかに邪悪な者たちであるか、またどのような悪性が彼らに宿っているのかを知る良い機会であるので、その名称だけでもここに記したい。(Harrison 184)

ハリソンはこの引用に続いて、「ある紳士」すなわちトマス・ハーマンによる浮浪者の解説そのままに浮浪者の名称を挙げていく。ハリソンがハーマンに依拠しているのは浮浪者の名称と種類だけではない。浮浪者共通の符牒とされ

る「行商人のフランス語」がいつ頃からどのように生まれたのか、その起源までハリソンはハーマンの記述を転用していた。浮浪者関連の情報でハリソンがハーマンと異なっているのはハーマンが挙げた二十四種類の浮浪者のうち、なにゆえかハリソンが「偽卒倒者 (Counterfeit cranks)」を省いて二十三種類にしていることだけである。ジョン・オードリーの創作と思われる浮浪者神話の部分まで同時代の実情として広く信じられていた背景には、明らかに歴史編纂家のハリソンがハーマンの浮浪者パンフレットを現実世界の出来事として認定したことがある。

シェイクスピアの『じゃじゃ馬馴らし (The Taming of the Shrew)』の「序幕」に登場する酔っぱらいのクリストファー・スライは今日の私たちにとって地方の陽気な鋳掛屋以外には想像できない。ところがこの登場人物はもと一六二三年の第一・二折本において「物乞い」というト書きを与えられた浮浪者であり、典型的な浮浪者の職業を転々とする社会の根無し草であった。

物乞い 俺を気違い扱いするのか？ 俺はバートンヒースのスライ親父の息子、生まれは行商人、犁作りで修業をして、熊使いに転職し、今は鋳掛屋に収まっているクリストファー・スライじゃねえとでもぬかすのか？

(*The Taming of the Shrew*, Induction 2, 14-16)

まったく同じような設定は『冬物語 (The Winter's Tale)』のオートリカスにも施されており、この登場人物は「猿まわし」から始まり、「召喚状配達人」と「人形芝居芸人」を通じて現在は「行商人」として小間物を売っている。オートリカスは浮浪者王コック・ローレルと同様に、表稼業の行商人を演じながらここぞという場面で窃盗犯に変身するのである。

四・結び

逸脱者の集団という点で、オードリーやハーマンが語る「浮浪者の友愛団」はゼバステイアン・ブランドの阿呆船に起源をもつ。ただし「浮浪者の友愛団」を束ねる浮浪者王の存在は『コック・ローレルの船』を通じてイングリッド社会の想像力が生み出したイングリッド特有のものである。十六世紀のイングリッド社会は現実世界の浮浪者とは異なる特異な「浮浪者」のイメージを發達させており、その典型的な例が「酔っぱらいの鑄掛屋」や浮浪者王コック・ローレルである。行商人や鑄掛屋であればリュックや道具袋をもってドサ周りをするばかりでなく、決まって陽気で酔っぱらいの女好き、そして凄腕の窃盗犯と見なされていたのである。

〔本論文はJSPS科研費・基盤研究C「エリザベス朝演劇における社会的弱者の表象」(研究代表者・中野春夫・課題番号23520320)の助成を受けたものである〕

(注)

- (1) 本論における議會制定法の引用は以下による—*Statutes of the Realm*, 12 vols (1819). Buffalo: William S Hein, 1993.
- (2) 本論におけるシェイクスピア劇の引用はすべてRSC全集版による—*William Shakespeare Complete Works*, Jonathan Bate and Eric Rasmussen, ed. Basingstoke: Macmillan, 2007.

(引用文献)

Awdeley, John. *The Fraternity of Vagabonds* (1561) in *The Elizabethan Underworld*, A. V. Judges, ed. London: George

- Routledge & Sons, 1930. pp. 51-60.
- Cocle Lorelle's Bote* (?1510). Edinburgh: Stanley & Blake, 1841.
- Copland, Robert. *The Highway to the Spital-house* (1535) in *The Elizabethan Underworld*, A. V. Judges, ed. London: George Routledge & Sons, 1930. pp. 1-25.
- Greene, Robert. *The Second Part of Cony-catching* (1591), in *The Elizabethan Underworld*, A. V. Judges, ed. London: George Routledge & Sons, 1930. pp. 149-78.
- Harman, Thomas. *A Caveat or Warning for Common Cursitors* (1566), in *The Elizabethan Underworld*, A. V. Judges, ed. London: George Routledge & Sons, 1930. pp. 61-118.
- Harrison, William. *The Description of England*, Georges Edelen, ed. New York: The Folger Shakespeare Library, 1968.
- Kimney, Arthur F., ed. *Rogues, Vagabonds & Sturdy Beggars: A New Gallery of Tudor and Early Stuart Rogue Literature*. Amherst: The University of Massachusetts Press, 1990.
- Martin Markell, Beadle of Bridewell* (1610) in *The Elizabethan Underworld*, A. V. Judges, ed. London: George Routledge & Sons, 1930. pp. 383-422.
- Pound, John. *Poverty and Vagrancy in Tudor England*. Second edition. London: Longman, 1986.
- Pugliatti, Paolo. *Beggary and Theatre in Early Modern England*. Burlington: Ashgate, 2003.
- Shakespeare, William. *The RSC Shakespeare: William Shakespeare Complete Works*. Ed. Jonathan Bate and Eric Rasmussen. Basingstoke: Macmillan, 2007.
- Statutes of the Realm*, 12 vols (1819). Buffalo: William S Hein, 1993.
- 中野、春夫、「行商人の裏稼業——十六世紀イングランド社会における浮浪者のイメージ」、『学習院大学文学部研究年報』第五九号 (二〇一二年)、一五七―一八三ページ。
- バイアー、A・L、『浮浪者たちの世界—シェイクスピア時代の貧民問題』、佐藤清隆訳、同文館出版、一九九七年。
- ブランド、ゼバスティアン、『阿呆船』(上)・(下)、尾崎盛景訳、現代思潮新社、一九六八年。